



共生の時代

'09
11月

●発行:グリーンコープ共同体的理事会 ●編集:共生の時代・編集部 ●〒812-8561 福岡市博多区博多駅中央街8番36号博多ビル7階 TEL092(481)7923 FAX092(481)7876

2009年10月9日 韓国ソウルで
「互恵のためのアジア民衆基金」
設立総会開催!



アジア各国から17人、日本から51人、韓国の生協(ハンサリム50人・ドゥレ69人)、その他関係者15人、総勢202人がソウルに集い、総会に臨んだ(本紙次号に特集記事を掲載予定)

Contents

ホームレス問題を考える 8	
「ホームレス問題の授業づくり」から見えるもの 2	
うちのメーカー・うちの生産者 ⑨	
(株)中野和一郎商店 中国産緑豆春雨 3	
あまりにも危険なプルサーマル 4・5	
～グリーンコープのこだわり再発見!～無蛍光肌着	
肌に直接触れる下着は 6	
やっぱり無蛍光にこだわりたい	
第5回酪農生産者交流会	
10年後20年後も	
ずっとずっとびん牛乳を飲み続けるために!	
設立20周年記念シンポジウム	
ATJ(オルター・トレード・ジャパン)は	
設立20周年を迎えました 7	

日本とインドネシアとの縁を結び続けたい!



大阪府生まれ。父親の転勤で小、中、高を横浜市で過ごす。大学進学のため関西に戻り、その後結婚。現在夫と2人暮らし。2人の娘たちもそれぞれ事業にかかわっている。宝塚市在住。グリーンコープ生協ひょうご組合員

プロフィール

有限会社トレテス 代表取締役 **山崎 律子** さん

「取」 材への緊張で夕べは眠れなかったんですよ」と微笑む山崎さんは(有)トレテスの代表取締役社長だ。看板商品の「ぶるんぶるん」は、インドネシア・トレテス地方に自生するこんにゃく芋を原料に、独自の製法で作る乾燥こんにゃく。「乾燥こんにゃくにゃく」の商品名でグリーンコープでも取り扱っている。「ぶるんぶるん」とはインドネシア語で「女性」という意味だ。「糸こんにゃくのぶるんとした食感にマッチした語感と、言葉の意味もひっくり返って気に入ってます」。原料の生産から加工、小分け作業はインドネシアでたぐさの女性の雇用に一役買っている。トレテスの社員もみな女性だ。

インドネシアとの縁は第二次世界大戦の頃に遡る。「インドネシアに渡ってタイピストをしていた母は当時としては『翔んでる女性』。通訳として現地に赴いていた父との出会いは、敗戦後日本へ帰る船だったそうなんです。そんな両親の元、姉とふたり幼い頃から守唄のようにインドネシアの話の間で育った。15年前、インドネシアにいる父の友人に「こんにゃくを食べる習慣のない土地で生まれた商品。現地の人々の生活向上のために日本で乾燥こんにゃくを売ってほしい」と頼まれた。その頃のインドネシアは「学校へ行けない」「裸足が当たり前」という、今以上の格差社会の中で貧しい人々ばかりだった。売ろうかと力になりたい。売ろうかと、奮い立って会社を興したのは姉だった。5つ上の姉は正義感と行動力の人。「私は恥ずかしい子。物心ついた頃から姉のひつつき虫でした。大人になってもその関係は変わらず、姉が打ち込む市民運動をサポートしていた山崎さんは、当然のように事業にかかわった。

会社を引き継いだのは起業から5年後、姉が政界入りを果たしたからだ。「私なんかでいいのかと思いました」と控えめに話す。しかし「ぶるんぶるん」のこととなると声はずみ、瞳が輝く。「ただ売るだけでは意味がありません。現地では雇用創出による村おこし、国内では障がい者の共同作業所に袋詰めを委託。それに共感してくれる人がいることに感謝!ですね」。今では自ら営業活動から雑用まで何でもこなす、年に2回は必ず現地へ視察に行く。「こうして仕事ができるのもインドネシアとの縁と、まわりの支えがあるから」。病気のためにシェフの仕事を手伝った夫も家について支えてくれる。「シェフが主夫になったって冗談で言うんですよ」。そう笑いながら、陽気で楽天家の一面もぞかせる山崎さん。これからは日本とインドネシアの縁を結び続けるだろう。

久しぶりに家でゆっくり、グリーンコープ生協おみやまのホームページを見ていたら、☆男子☆飯☆クラブなるものがブログに登場していた。職員さんたちがオースメレシビの参考にしようとして、自分たちで調理して食べているとのこと。写真付きでもおもしろそう。盛り付けもきれい。頼もしい職員さんたちのように、息子2人にも自分で食事を作れるようになってほしいから、教えなきゃとは思っているが、めんどろ

送 信

くさい。「グリーンコープで育てているから、本当においしいものは分かるでしょう、自分の舌を信じて自分で生きていきなさい」と、あっさり放任。でも、私も息子も自分を信じきれないので頼りにするのはグリーンコープ。青少年食育料理講座とか、誰かやってくれないかなと真剣に無責任に考えた昼下がりの話だ。

グリーンコープ生協おみやま理事長
坂口 陽子

「ホームレス問題の授業づくり」から見えるもの



「ホームレス問題の授業づくり全国ネットワーク」
共同代表 生田 武志さん

ホームレス者を青少年が襲撃するという事件が後を絶たない。殺人にまで至るケースもある。そのような状況を何とか越えたいと、学校現場に働きかけ、ホームレス問題を子どもたちと一緒に考えようという動きがある。「ホームレス問題の授業づくり全国ネットワーク」だ。生田武志さん（野宿者ネットワーク代表）、北村年子さん（フリージャーナリスト）ら4人が呼びかけ人となって、2005年4月に立ち上げた。

共同代表の1人生田さんは学生時代から大阪釜ヶ崎の日雇労働者・野宿者支援活動に関わり、以来20数年間を住人としてホームレス支援にあたってきた。そこから浮かび上がってくるものは何か、生田さんに聞いた。

ホームレス問題を考える 8

1 986年、生田さんは

学生時代、たまたまテレビで釜ヶ崎の取材番組を見た。下宿先からわずか1時間半のところにもそのように過酷な世界があるということに衝撃を受けた。当時、自分と社会との接点が見つけれないという「現実喪失感」に苦しんでいた。引かれるように釜ヶ崎を訪ねた。ドヤ街が建ち並ぶ独特の環境は社会一般の価値観から切り離され、どこか自由でやさしさがあつた。みんな身体を張って一生懸命生きていた。当時はまだ仕事もそれなりにあつた。

そんな風景が一変するのは90年代に入って以降だ。仕事が激減し一挙にホームレスになった人が溢れた。肉体労働が難しくなった高齢者や病気を抱えた人が真つ先にホームレス化したのだ。その頃から、青少年によるホームレス襲撃事件も頻発しはじめた。襲う少年たちはごく普通の子どもたち。だが共通していることがあつた。ホームレス者を襲

い、時には死に至らしめているのに、少年たちには驚くほどの罪の意識がなかった。

差別という暴力

青少年によるホームレス者襲撃に対して、生田さんは次のように考える。

誰かを襲撃するという行為そのものは、社会に普遍的にみられ、決してめずらしいものではない。つまり、人間とは、自分と同類とみなした人間を殺すことには強烈に抵抗感を感じる一方で、ある人間が自分の属する共同体の外にいて、しかもその人間に対して自分の共同体が優位にあると判断した時は、骨もみんなぐじぐじや「なるようになる」常に行っているように見える。仮にそう考えれば、少年たちの襲撃は、私たちの社会にとつて別に「胸に覚えのない」ものではない。ただ単に少年たちは、社会的弱者であるホームレス者を、自分たちの共同体の「外にいる人間」と明

確に意識しているだけである。私たちの社会は、子どもに「ホームレス者」に話しかけられないと無視しなさい」「勉強しなさい」と教えている。そして「迷惑だ」と言っている。行くあてのない野宿者を商店街や公園から追い出している。おそろしく少年たちは、幼い時からこうした大人社会の対応を見て、野宿者を外部の人間として「学習」しただけなのだ。これでは、少年たちにとってホームレス者はいかなる意味でも人間的な「共感」の対象ではありえない。

ホームレス者の多くはダンボールや空き缶を集めたりしてひっそり暮らしている。「彼らの本当の姿を知ってほしい。この暴力的な社会構造を告発したい」「ならば」と、学校に向いて高校生・中学生を対象にはじめたのが「授業だ」。

授業は2001年からはじめた。2005年には「ホームレス問題の授業づくり全国ネットワーク」も立ち上げた。授業の要請回数も増えている。今では全国各地の小中高校でホームレス問題や貧困に関する授業を行う。

授業、そして「アイス取りゲーム」が教えるもの

生田さんは授業の前に生徒に対して、アンケートをとることがある。ホームレス者に対して彼らがどんな意識を持っているかを知るためだ。地域差あるいは階層差でその意識は異なる。ある進学エリ

ト校では、ホームレス者に対して「社会的地位の向上をめざさなかつたので、尊敬に値しない」「人間ではない」「世界が違う」などの感想が出た。そこまで極端ではないにしても、「怠けていたからホームレスになつたのではないか」「ホームレスになつたのは本人の努力が足りなかつたからで、それは自己責任だ」という大人の見方に同調する生徒は多い。それにゲストとして授業に参加してもらつたホームレス者自ら「こうなつたのは自業自得です」と言うことさえある。彼らは「もつと我慢して仕事をしていたら」「借金しなかつたら」とひたすら自分を責めるのだ。

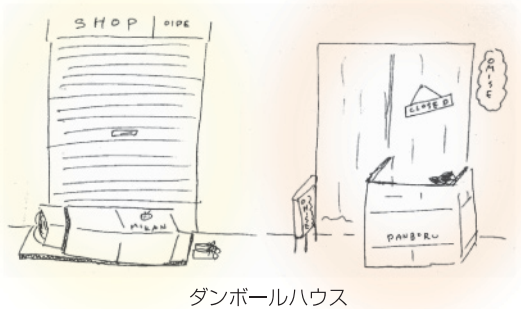
しかし、80年代までは同じ状況でもホームレスになる人はほとんどいなかった。パブルがはじけ一挙に失業者が増え、それがそのままホームレスの増加につながつた。つまり、社会構造が変わつたといふことが最大の要因だ。すべて個人が悪いわけではなく、また社会のせいだけでもない。その見極めが大切なのだ。そのことを理解してもらつたために「アイス取りゲーム」の例えを小道具に使う。3つのアイスに対して5人がアイスを争うというものだ。アイスを仕事とみなすと絶対数が不足しているから、必ず2人は失業するということになる。これは「本人の努力」だけでは片付かない。社会構造の問題なのだといふことを分かつてもらう。確かに仕事さえあれば少なくともホームレス問題の多

くは解決する。授業の成果一出会いがもたらすもの

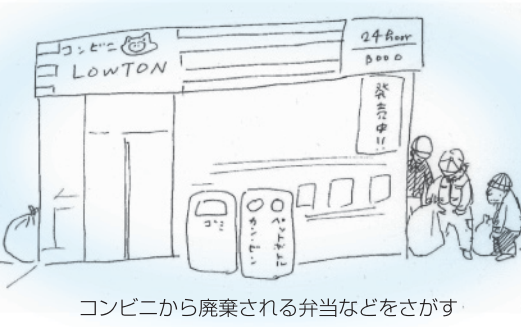
授業をする初めは無関心だった生徒のうち、クラスに1〜2人は強い関心を示し、その後「夜回り」などに参加しさえする。生徒の一人が釜ヶ崎で研修を終えて書いた感想文が、「私はホームレス問題にぶつかつて、社会というものを肌で感じた気がする。自分と社会の結びつきを、この問題は教えてくれる気がする」。

また、別の生徒は「ぼくは釜ヶ崎が好きで、そこに住んでいるおっちゃんたちも好きだ。釜ヶ崎の人たちで厳しい生活を強いられる人はきつとやさしすぎるんだと思ひました。やさしすぎてアイス取りゲームのアイスを譲つてしまふのではないかと思ひました」という感想を書いてくれた。アイスを取ることだけが勝者となるという今のゲームのルールとは別のルールが生まれるかもしれないという予感がする。実はこの生徒は授業前のアンケートでホームレス者に対して「人間ではない」などと書いた進学エリート校の生徒だった。

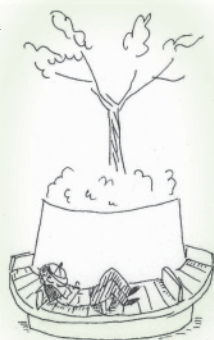
ホームレス問題と出会い、実際にホームレス者と出会うことによつて、生徒たちは「社会」と「自分」を問い直しはじめる。生田さんはそれを「希望」と言う。



ダンボールハウス



コンビニから廃棄される弁当などをさがす



ホームレス者が使いにくいように仕切りが付けられた公園のベンチ

安心・安全な緑豆春雨を届けたい

うちのメーカー



福岡市西区
(株) 中野和一郎商店

うちの生産者



中野和義会長(左)と中野和誠社長



2008年の中国産餃子事件以降、中国産食品の安全性が疑問視されるようになりました。また組合員からも国産の原料、食品を望む声が高まっています。

受けて、グリーンコープはこれまで以上に国産を重視していくという方針を立てました。しかし、「緑豆春雨」は日本で作ることが難しく、中国産のものを継続するとなっていました。

中国山東省にある中国産緑豆春雨の工場を視察し、そのようすと、日本での取引メーカーである(株)中野和一郎商店の商品の安全性に対する考え方について紹介します。



黒龍江省の畑に育つ緑豆 黒く細く伸びているのがサヤ



原料の緑豆

信頼できるメーカーを探して

中野和一郎商店の創業は1959年。今年50周年を迎えた。グリーンコープとは前身生協の時代から、20年以上の付き合いだ。いりこなどの乾物類からはじまり、今では約30アイテムをグリーンコープに納入する。中国産緑豆春雨の取り扱いは1997年から。品質や信頼関係の問題などから中国の製造メーカーが何度か変わった。安心・安全に対する意識や考え、姿勢は国によって違いがある。その厚く高い壁にぶちあたりながら、当時の社長(現会長)の中野和義さんは、輸入業者を紹介し信頼できる春雨メーカーを探した。



双塔食品 李玉林 社長

越えた中国の人の心にも伝えられたと実感できるようになった。従業員に衛生管理や製品への責任感を持つことを徹底させ、クレームがあった場合など即座に対応し対策を講じる姿勢に、中野和一郎商店として信頼を置いていた。

緑豆春雨は本場中国産で

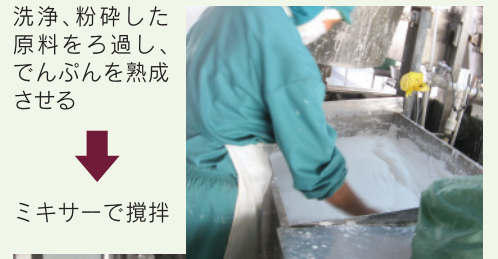
中国の春雨の歴史は約1000年前に遡る。もともとは麺として食された。緑豆春雨は、コシが強く、のどごしがよく、そして煮崩れないのが特長だ。そのため昔からさまざまな料理に使われ世界中に広がっていった。

原料の緑豆は北部の黒龍江省で栽培されている。昼夜の寒暖の差、きれいな水など、良質の緑豆が育つ条件が整っている。緑豆春雨の品質は、緑豆のでんぶの質が決め手。細く光沢があり透明なほど高級感あるよい春雨とされている。

1925年頃日本国内でも緑豆春雨の製造が試みられた。

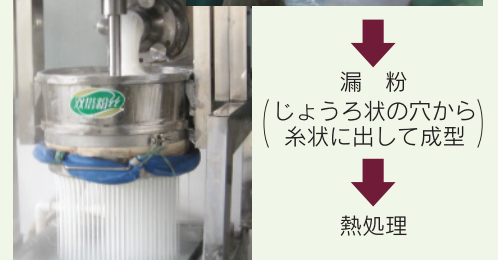
中国産緑豆春雨ができるまで

【原料:緑豆】



洗浄、粉碎した原料をろ過し、でんぶを熟成させる

ミキサーで攪拌



漏粉 (じょうろ状の穴から糸状に出して成型)

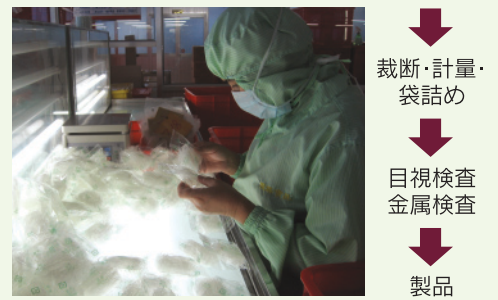
熱処理



冷凍 (-16℃で約19時間)

水のシャワーで解凍

乾燥 (温度・時間はコンピュータ管理)



裁断・計量・袋詰め

目視検査 金属検査

製品

しかし、国内での緑豆の栽培が難しかったことや、緑豆からでんぶを取り出す技術が当時日本になかったことから、日本では主に甘藷や馬鈴薯のでんぶから作る春雨が使われるようになった。以降、「緑豆春雨は中国産」が定着していった。

近代設備が整う大工場生産される緑豆春雨

緑豆春雨の生産工場が集中する山東省の招遠市は、約300年の歴史を誇る春雨の産地だ。そこで生産される春雨のほぼ2割のシェアを双塔食品が有する。30万㎡の広大な敷地に建つ工場には2600人の従業員が働いている。ISO9001、ISO14001やHACCPなどを取得・導入し、商品は世界中に輸出されているという。工場は日本、韓国、東南アジア、ヨーロッパ向け、それぞれ別棟になっている。国や地域の嗜好に合わせて、少しずつ原料や製法が異なる。例えば、韓国向けにはさつま芋を、東南アジア向けにはエンドウ豆を原料とし、天日で乾燥させる、といった具合だ。

日本の要望に応えられる 安全な春雨を

「日本の取引先は要求レベルが高い。品質はもちろん、異物除去や包装には特に注意を払っています」と社長の李先生。「原料の緑豆は契約農家で農業をせずに栽培されています。春雨の製造にも薬



計量部門の部屋。計量前後の箱は色別に分けられ、ミスのないよう作業がすすめられる

「仕入れる商品は組合員さんと同じ目線で選びます。国産でないものはなおさら慎重に。現場を見て自分たちが納得したもの、自信を持ってお届けしています」と社長の中野さん。安心・安全な食べものを求める組合員の気持ちから十分理解しているからこそ、グリーンコープを支えてきたメーカーとしての自信に満ちた言葉だ。

※1 品質マネジメントに関する国際規格
※2 環境マネジメントに関する国際規格
※3 食品衛生・品質管理方式

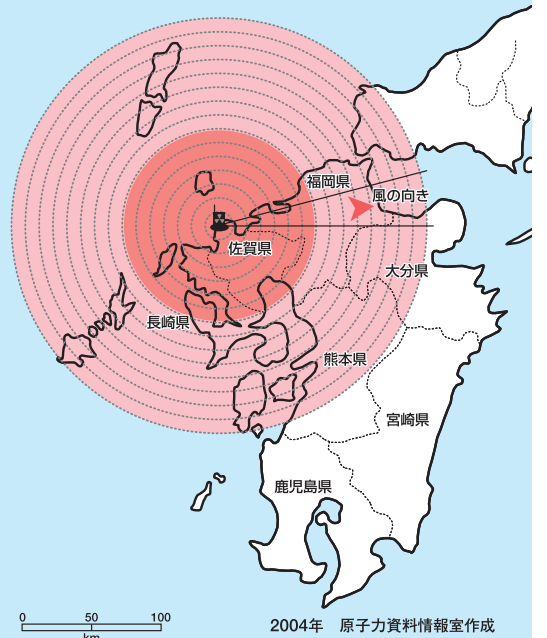
危険なプルサーマル



本で初めてのプルサーマル計画が九州電力玄海原発で実施されようとしています。2009年5月、多くの市民が不安を抱え反対する中、原発3号機にMOX燃料が搬入されました。市民が抱くプルサーマルへの不安要因は何も払拭されないまま、政府や電力会社は、プルサーマル計画を推しすすめています。

リーマンショックが理念として掲げている「**いのち**・自然・暮らし」を、「子どもたちにみどりの地球をみどりのままに手渡す」ためには、許してはいけないプルサーマル。その問題点に迫ります。

玄海原発3号機で重大事故が発生した場合の被害予測



現行のウランを使用する原発よりも距離にして約2倍の被害拡大が予測されている。

- 半数が即死する放射線量の範囲 (3シーベルト以上)
- 急性障害、一部死亡の放射線量の範囲 (1シーベルト以上)

脱原発社会をめざして

エネルギー多消費社会を維持していくために、原子力発電を日本政府は推しすすめてきた。グリーンコープは、一度事故が起こればあらゆる生命に取り返しのつかない影響を及ぼす原発に、反対の立場を貫き、さまざまな運動に取り組んできた。そうした中、1986年チェルノブイリ原発事故が発生。炉心溶融による爆発で放射能が放出、地球全体を汚染した。日本も例外ではなく、当時、多くの人々が食品の放射能汚染に敏感に反応した。チェルノブイリ原発の風下にある白ロシア(現ベラルーシ共和国)では汚染地域で暮らさざるを得ない人々が約500万人もいた。そして今なお、多くの人々が被曝で苦しんでいる。

グリーンコープは、こうした事故の状況に原発の問題点を改めて再確認し、脱原発の必要性をいっそう強く認識した。1988年のグリーンコープ結成大会で、「原子力発電・原子力発電増設についての再考、出力調整実験中止」の要望書を九州電力に提出することを採択。1995年には

共生をめざし、生命そのものの尊厳を守るという理念を基本にして「エネルギー多消費社会の環境問題」「放射線の危険性」「プルトニウムの危険性と経済性の問題」「原発の過疎地への立地問題」などを項目にたて「グリーンコープ脱原発政策」としてまとめた。

グリーンコープのエリアには川内原発や玄海原発などがあり、現地の単協の取り組みに連帯しながら、原発の運転中止や増設計画の撤回を求めて、署名活動等に取り組んできた。

原子力発電の燃料となるウランは、化石燃料などと同様にその埋蔵量には限界がある。しかも核燃料として燃やせるのは、ウラン235で、天然ウラン全体のわずか0.7%しかない。99.3%は燃えないウラン238だ。そのため、原発から排出される放射性廃棄物を再生することで産出するプルトニウムを、準国産エネルギー資源として有効利用しようという核燃料サイクルが国の政策としてすすめる

のが「高速増殖炉」だ。高速増殖炉は燃えないウラン238をプルトニウム239に転換させ、1.2倍に増殖させることができる。とされてきた。しかし、1980年代前半の実用化をめざして開発された「高速増殖炉もんじゅ」は、1995年に冷却材の金属ナトリウム漏れ火災事故で頓挫。高速増殖炉を中心とした核燃料サイクルはその時点で破綻した。

日本は核拡散防止条約に基づき、核兵器に転用可能なプルトニウムを保有しないことと世界に向かって公約しており、プルトニウムを消費する必要性に迫られている。そこで浮上してきたのがプルサーマル計画だ。

佐賀県玄海原発3号機でのプルサーマル実施のために、今年5月、MOX燃料が搬入されたことで、地域住民の反対運動がいっそう強くなっている。

推進すべきか

推進論と反対論と大きく論点となっている点を整理してみよう。

安全性に関して

・プルサーマルは海外での豊富な経験により、その安

現在の原発でも発電中にプルトニウムが生成されており、そこでもプルトニウムは燃えている。

・MOX燃料の特性に配慮した燃料配置にするので問題は無い

反対論

・プルサーマルの実施経験があるのは、世界の原発の1%に過ぎない

・フランスなどの実績での燃料中のプルトニウム濃度3.0〜4.6%程度に比べ、玄海原発3号機で使用されるMOX燃料のプルトニウム濃度は6.1%と高い。燃焼度もフランスでも経験したことのない領域まで上げるとなっている。これらは世界中、どこも経験したことのないものだ

燃料棒中のプルトニウム濃度には差がある。そのため燃料ペレット内の燃え方にムラができる。不安定なペレットが発するエネルギーの偏りによって、燃料棒の皮膜が破損し、原子炉にダメージを与えてしまう可能性がある

・MOX燃料は中性子を大きく吸収するため制御棒の効きが悪くなる。事故に誘われる核の暴走を招きやすく、事故が起これば被害甚大

佐賀県玄海原発3号機でのプルサーマル実施のために、今年5月、MOX燃料が搬入されたことで、地域住民の反対運動がいっそう強くなっている。

経済性に関して

推進論

・使用済みウラン燃料は95%再利用でき資源の有効利用になる

・核廃棄物が大幅に減る

反対論

・使用済みウラン燃料のうち、再利用できるのはわずかな量のプルトニウムだけ

・MOX燃料に使うウランは常に新しいものを購入。加えてMOX燃料の加工費、輸送費、貯蔵費などの費用も膨大。さらにプルサーマ

体の3/4)が使われている。これではとうていリサイクルとは呼べない

・使用済みMOX燃料を再処理する際に新たな放射性廃棄物が発生する

使用済みMOX燃料の問題

推進論

・国は「種々の選択肢から電力事業者が決定していくもの」としている。九電は「当面は原発敷地内の貯蔵プールに保管」

・2010年から検討し、2045年を目途に第二処理工場で行う予定

使用済みMOX燃料は高い放射能毒性を持つアメリカシウムなど超ウラン元素を含み、その発熱量は膨大

使用済みMOX燃料は地中に埋設できる温度になるまで500年かかる

・現在、六ヶ所再処理工場での、高レベル廃棄物のガラス固化体が製造不能となっていることから、本格稼働は延期されている

・使用済みMOX燃料の処理については2010年から検討されるとなっているが、まだ未確定

膨大な危険性があり、経済性もないプルサーマルが玄海原発で行われようとしている。事故が起これば、私たちの生命を脅やかしかねない。これほどにも大きなリスクをかかえて、プルサーマル計画を推進する意味があるだろうか。一人ひとりが暮らしを見直し、脱原発社会を実現することにこそ、国や人々が傾注しなければならぬことなのだ。



あまりにも危 プル

間近に迫る! 玄海原発でのプルサーマル

グリーンコープ生協さが協力団体として名を連ねる「NO! プルサーマル佐賀ん会」は、九州電力に玄海原発でのプルサーマル計画に関して公開質問状を提出。九電からの回答は、文書ではなく、口頭で行われました。また、2009年春から取り組んでいた「プルサーマルに反対する40万人署名」を佐賀県知事及び佐賀県議会に届けました。同時に「玄海原子力発電所3号機でのプルサーマル実施延期を求める決議」の採択を求める請願を行いました。

プルサーマル質問に対する九電回答

「NO! プルサーマル佐賀ん会」(以下「佐賀ん会」)が、7月2日に提出していた九州電力への公開質問状に対し、九電からの回答を受ける場が8月19日に設けられました。「佐賀ん会」のメンバーをはじめプルサーマル計画に反対する市民らが集結しました。

公開質問状の内容は、大きく分けると以下の3点に要約されます。

1. 全国のプルサーマル計画が「5年延長されたこと」について
2. 六ヶ所再処理工場について
3. 使用済みMOX燃料について

回答日、冒頭述べられた電力会社側の応答は、これまで九電のホームページ上で表明していた見解の繰り返しで、具体的に踏み込んだ内容は何もありませんでした。「佐賀ん会」から、九電側は説明責任を果たしていないと、矢継ぎ早に質問が飛び出しました。「MOX燃料の将来的な確保の見通しもない中で、なぜ今やるのか、他の電力会社に合わせて5年待てないのか」「六ヶ所再処理工場は止まったままなのに、九電だけ見切り発車するのか」「使用済みMOX燃料の処理について、六ヶ所も高速増殖炉もんじゅも稼動していないのに、本当に2010年から検討がはじめるのか」など、原発立地地域の住民の切実な危機感を抱いた質問でした。これに対し九電側は言葉に窮し、回答に詰まる場面がたびたび見られ、後半はほとんど黙りこくったままという状態。回答者が佐賀支店の広報担当者で、質問状への回答者としては不相当であり、後日改めて回答の場を持つということでこの日は終了しました。しかしその後回答は未だありません。



41万7355人の署名を携え、佐賀県議会に請願

日本で最初のプルサーマル計画が今秋にも実施されようとしている緊迫した状況の中、「佐賀ん会」を中心にした個人や市民団体が、県内57,387人、県外359,968人、合計417,355人の署名を集めました。2009年9月14日佐賀県議会当日、県庁を訪れ古川康県知事と留守茂幸県議会議長に署名を届けると共に請願を行いました。

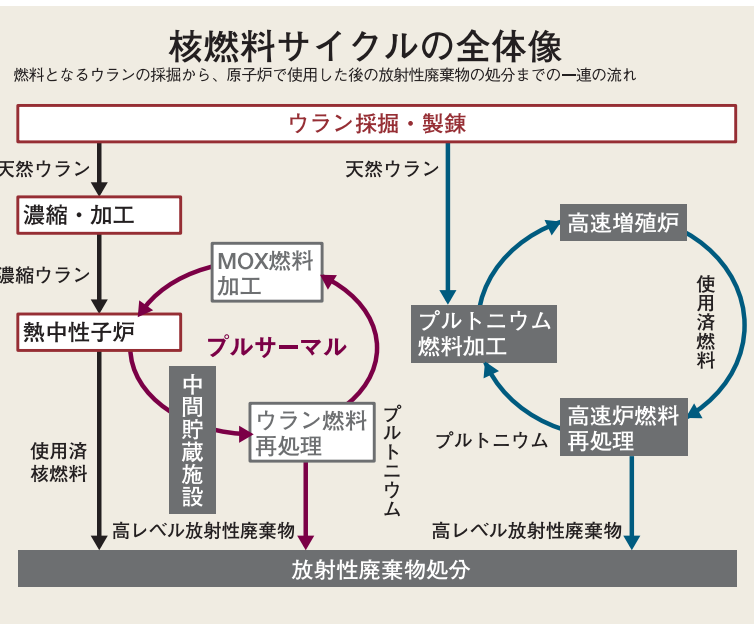
請願の趣旨

1. 多くの佐賀県民や全国の人びとがプルサーマルの延期を希望
2. 燃料の品質に関して十分な情報公開がされていない
3. 「使用済みのMOX燃料」の処理の方策がまだできていない
4. 市町村レベルでの危機管理体制が整っていない
5. MOX燃料の使用について十分な実績がなく、安全面において不安がある
6. 耐震安全基準は国の承認をまだ受けていない

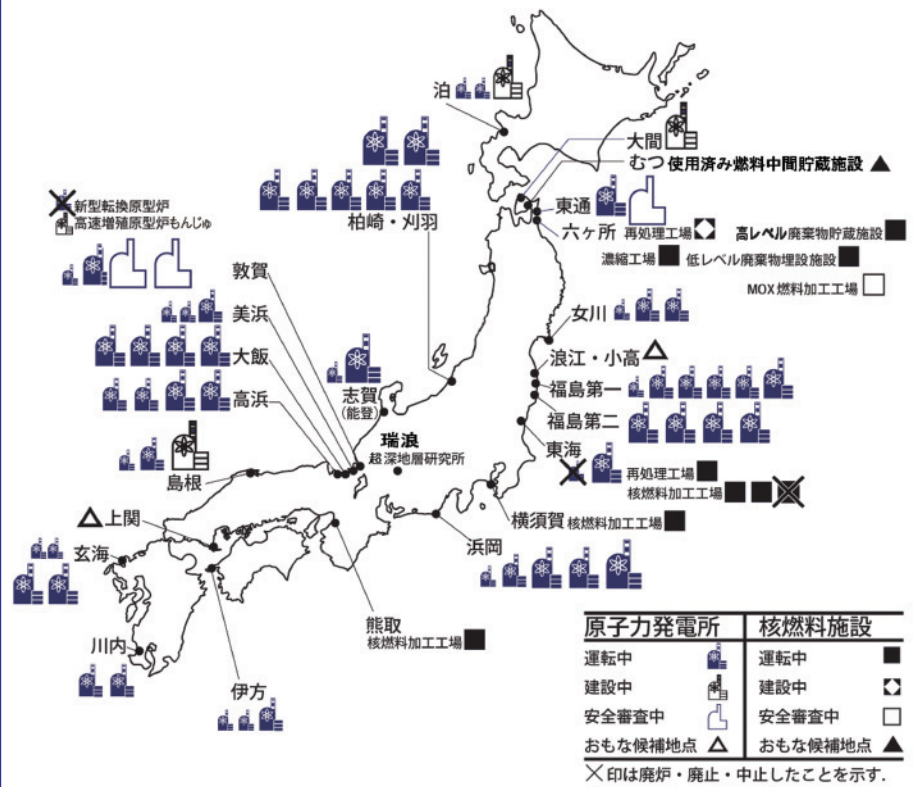
以上6つの理由から「玄海原子力発電所3号機でのプルサーマル実施延期を求める決議」の採択を求めるといふものです。

留守議長との面談では紹介議員(県民ネットワーク)や当日参加した「佐賀ん会」のメンバー、グリーンコープ生協さが田中理事長はじめ組合員2人との意見交換が行われました。請願者からの意見は、「請願の取り扱いが議会で判断されるまでは、少なくともプルサーマルの稼動を行わないということ九電に申し入れて欲しい」というものでした。議長の応答は、「プルサーマルの推進は、県議会も含め佐賀県の確認事項であることから、今現在その判断はできない」ということでした。参加者からは、「佐賀を核のゴミ捨て場にしないでほしい」という悲痛な声と共に議会での慎重な審議の要望が出されました。その後、10月15日、玄海原発3号機へのMOX燃料の装荷がはじまりました。運転開始は12月になる見通しです。

「佐賀ん会」は、今後も議会の動きを注視しながら、諦めることなく抗議行動など、市民や関係団体に呼びかけていきます。



原子力発電所および核燃料施設



【2008年11月末現在 原子力資料情報室の資料より作成】

自然界にはないに等しかった人工合成元素プルトニウム。プルトニウムはウラン鉱物中にはほんのわずかしかが存在せず、原子炉の中の核分裂で多量に発生する人工合成元素。他に類を見ない毒性があり1gで9万人の致死量、100万分の1gで肺がんをおこすといわれている。その毒性の半減期は2万4千年。日本が現在までに英国・フランスに委託して蓄積しているプルトニウムは45tを上回っている(長崎型原爆4000発分)。そのまま核兵器に転用できる物質

日:
うと
玄海
マル
サー
グ
守り、
決し

地球上のあらゆる生命との

れてきた。その中心にある

全性は確認されている

ルには新たなウラン燃料(全



「グリーンコープ」の
こだわり再発見!

無蛍光肌着

肌に直接触れる下着は やっぱり無蛍光にこだわりたい

インナーウェアの安全性は「無蛍光」である

市場には新しい化学繊維や薬品で加工された華やかな衣料品であふれています。インナーウェアも同様に流行に彩られ、私たちの回りに出回っています。

グリーンコープは市場が変化していても、せめて直接身に付ける肌着に関しては、「安心・安全」にこだわるといふ姿勢を貫いてきました。その一つが「無蛍光肌着」です。

無蛍光とは、製造工程中に蛍光剤を使用しないということです。蛍光剤とは、太陽光線の中の目に見えない紫外線を吸収して、目に

見えるようにする化学物質

です。染料の一種で繊維を白くきれいにさせるために使われます。一方で、日本薬局方ではガーゼや包帯・マスクなどに、薬事法では生理用品や紙おむつ・ちり紙に、食品衛生法では食品や包装材料・紙コップなどに、それぞれ蛍光剤の使用は禁止となっています。

グリーンコープはこれまで、不要な化学物質は使わない、というこだわりを貫いてきており、当然肌に直接触れるインナーウェアも「無蛍光」でありたいと考えてきました。そうしたことから、多少ファッション性に欠けていても、蛍光剤を使っていないものを企画し続

けています。

専用の製造ラインで
守られている「無蛍光」

大阪市東淀川区にある飯田織工は、創業から102年という歴史の中で多様な染色のノウハウを蓄積してきており、「自社開発の工場管理システム」で繊維学会技術賞を受賞するなど、技術力に定評のあるメーカーです。工場の全工程がIT化され、高い生産性を生み出しています。1日で1反10kgのニット生地1300反(白物500反・色物800反)の染色・漂白仕上げを

行っています。生地の素材は天然素材(綿・麻、合繊、混紡などさまざま)です。かつて多かった綿は全体の3割程度、今はレーヨンのタイプが多くなっているようです。

その中で無蛍光部門はわずかのシェア(1日50反程度)しかなく、特別に設けられた「無蛍光」専用ラインを使って製造されます。工場内は蛍光染料での仕上げをしているものが多いため絶対に移染しないよう

縫製工場での徹底した分別工程

配慮が施されています。そして、最終工程のブラックライトで厳しくチェックされます。

飯田織工の津田修取締役専務は、「繊維業界は厳しい。生産の95%はインドや中国などに依存しており、国内の生産量は5%しかない中でしのぎを削っている状況です。その中でわずかであっても無蛍光仕上げをする工程は大事にしています。そこを担当する従業員には無蛍光の意味をきちんと話して分かってもらっています。無蛍光仕上げを受注した当初は、蛍光剤をすぐ移染させてしまうという失敗が続いたといいます。

1ツ1枚を約50秒で縫い上げます。また、男性用のメリヤス肌着500枚を1日で仕上げます。

「ここには、中国などで見られるように流れ作業の1工程を1人の作業員が座ったまま担当するのではなく、パツごとに違う無蛍光の糸がセットされたミシンの間を人が移動して縫製を行うようにしています」と工場長の高橋正行さん。

この生産方式は「トヨタ方式」と呼ばれ、人の労働意欲を大切に、徹底した効率化をめざすというもので、誰もが全工程のミシン掛けを担当します。作業員は休憩時間を除き、1日中立ったままです。

無蛍光肌着の主な製造工程

編立工程



紡績糸

糸で編み上げて生地を作る

生地

丸編(筒型)
横編(平型)

染工(無蛍光)工程



生地倉庫



無蛍光ラインの染色機



仕上げ機

(無蛍光取り扱い説明が各所にある)



検査

(ブラックライトを当てて生地をチェックする。蛍光剤に汚染していると青白く光る)

縫製工程

裁断(500枚の生地を寸分たがわず断裁するには高い技術力が必要)



生地検査(ブラックライトで蛍光汚染をチェック)



縫製(蛍光汚染しないよう隔離されている)



片倉工業 菊池清次さん
和賀繊維工業社長 高橋正男さん
和賀繊維工業工場長 高橋正幸さん

検査 → 製品

日本において斜陽産業となっている繊維産業、とりわけ縫製業界の空洞化は激しいと言われています。そのような中で、無蛍光肌着の縫製を行っているのが、岩手県北上市にある片倉工業指定の和賀繊維工業です。

飯田織工から運ばれた生地は和賀繊維工業で縫製・製品化されます。そこでも蛍光仕上げの生地と触れないように、生地の保管からすべての工程が徹底的に隔離した状態で扱われています。

これまで守ってきた「国産無蛍光肌着」は、最近組合員の利用が減少していません。流行に流されない、品質のよい「無蛍光肌着」は身体をやさしく包み込んでくれる逸品です。肌着は第二の皮膚と言われるほど大事なものの、食べものにもこだわりたいものです。



▲視察訪問・交流で訪ねた森山さんの牛舎。「飼料代が高騰する中、なるべく自前で作るように頑張っています」と森山さん

第5回酪農生産者交流会

10年後 20年後も ずっとずっと びん牛乳を飲み続けるために！

グリーンコープでは、生産者に酪農をずっと続けてもらうために、そして私たちが産直びん牛乳を飲み続けることができるよう、産直びん牛乳の「生産奨励金」を届けています。

2009年9月4日、第5回酪農生産者交流会を開催、生産奨励金を贈呈しました。グリーンコープからは各単協の理事長・副理事長など18人が参加、酪農生産者や農協関係者ら、合わせて約40人が集いました。

重ねる交流と
深まる信頼



交流会の冒頭、グリーンコープを代表して共同代表理事田中裕子さんが「これまでには組合員が産地を訪れていました。今後は生産者のみなさんに単協に来ていただき、交流する取り組みがはじまります。生産者のみなさんには感謝します。今日1日、そして今後の交流をおして、びん牛乳への思いと、お互いの信頼を深めていきましょう」と挨拶をしました。

続いて第5回目の生産奨励金1638万円(4ヶ月分)の目録が、ひょうご理事長長沼浩美さんから生産者代表の坂本さんに手渡されました。また「組合員からのお手紙」がみやざき理事長杉尾紀美子さんから生産者代表大田黒さんに手渡されました。

それらを受けて、non-GMO牛乳生産者委員会長矢野桂吾さんが「今回もたくさん生産奨励金をいただきとても感謝しています。酪農の厳しさはまったく変わっていませんが、生



▶生産者を代表して坂本さん(左)に生産奨励金(目録)が手渡された



▲各単協から、びん牛乳の利用普及のためのさまざまな取り組みの報告がされた。これからは顔の見える関係を大切に、びん牛乳のよさを伝え、利用普及につなげようという心をもつにつれて
◀みるみる通信(かごしま)より

産奨励金は私たちにとって経営の安定の大きな助けとなっています。これから鹿児島から大阪まで出かけ、みなさんとの信頼関係をより強くしていきたいと思えます」と、生産者を代表して挨拶をしました。

3班に分かれ、酪農生産者の牛舎を訪ね、それぞれに交流をしました。

酪農生産の
現場を訪ねる



グリーンコープ連合の担当者から、供給状況や今後の取り組みの報告がありました。「びん牛乳は、グリーンコープにとって大切なものなのです。その意味を知るための取り組みがはじまります。生産者のみなさんが直接地域の組合員と出会うことで、顔の見える関係を実感してもらいたいと思えます」。

生産者の一人森山良一さんは父親の代から続く酪農家です。牛舎には、約10頭の乳牛がおり、大切に育てています。「牛10頭というのは少ない方ですが、この牛たちは私が中学生の頃いた牛の14代目くらいになります。牛乳は大切なものを育てる食べものなんだと実感しています。皆さんと直接会って意見を聞けるのは、酪農を続けていく上でとても貴重なことです」と力強く話しました。

参加した5つの単協から、それぞれに趣向を凝らしたびん牛乳利用拡大の取り組み報告があり、会場が賑わいました。その後、昼食交流会では、生産者と組合員が和やかに歓談しながら親交を深めました。午後からグリーンコープの参加者は

今回の交流会は、厳しい経済状況が続く中、組合員、生産者、職員が一体となつて、より一層の交流と信頼を深め、連帯を強めた有意義な会となりました。



No. 16

「高齢化」する日本の原発

来年、運転開始から40年を迎える敦賀原発は、今後10年間の継続運転が認められました。他に今後5年間で7基も40年を迎える原発があり、新聞報道によると、「日本は『高齢原発時代』に入る」と言われています。原発の寿命について国に規定はありませんが、電力会社は当初30~40年の運転を想定していました。しかし新規立地、増設には地元同意に時間がかかることから、国は1996年に「安全対策を取れば60年運転しても健全性は確保できる」と方向性を示していました。日本では稼働する53基のうち1970年代から運転を続ける原発は18基もたと言えます。このように、新設、増設が懸念される中、耐震基準が今より緩かった時代に建設され、老朽化した原発が稼働し続けている中、地震等の災害時に我々の安全は確保されるのでしょうか？子どもたちの輝かしい未来は確保できるのでしょうか？

グリーンコープ共同体組織委員会

設立20周年記念シンポジウム 2009年9月12日



ATJ(オルター・トレード・ジャパン)は 設立20周年を迎えました

世界的な砂糖危機によって飢餓の島となったフィリピンネグロス島への緊急救援のために設立された日本ネグロスキャンペーン委員会(現APLA)が、緊急救援後の支援のあり方としてはじめたマスコバド糖の輸入。その活動を基盤に1989年に生協や市民団体が共同出資してATJは立ちあげられました。それから20年、交易会社として多国籍企業支配ではない、オルタナティブな貿易の試みを続けてきました。

民衆交易(People to People Trade)はその名の通り、人と人とのつながりを求め続けてきたと言えます。その橋渡しをATJが担い、現地の生産者が見えるというやり方を追求してきました。現地に駐在員をおいたり、関連する組織を立ち上げたりして生産者の声に耳を傾

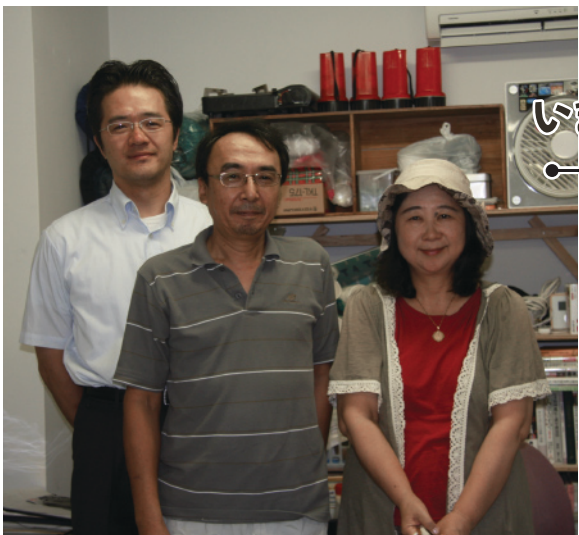
け、商品が適正に生産されているかをきちんと確認してきました。当日のシンポジウムでは、研究者から「バナナの生産者の所得はフィリピン国内でもまだ低い状況だが、小作人から自作農になり、日本の消費者と、人として尊重しあう交流をするなど、バナナの交易をおして向上心の高い生産者に成長している。生産技術を高めたいという生産者の自覚や、子どもに高等教育を受けさせたいという、親としての当然の思いを持てるようになったことは特筆すべきだ」と評価されています。

「多くの失敗も苦しみも経験し、その度に現地の人たちと手を携えて乗り越えていくことで、運動は強さと広がりが増えてきた。ネグロスでは生産者自らが農村社会のあり方を夢見るまでに到達した。この20年を検証してみてもう一度、この面は、人と人とのつながりがあった。ただそれが本当に価値があったのか、目的は果たされたのか、背景にある倫理観は貫けたのか、問い直す作業が必要」とATJ社長の堀田さんはATJのこれからを問いかけました。

20年の歴史を確認しあうことが、次の10年、20年につながっていくことになるという実感がもてるシンポジウムとなりました。

ホームレス者もそうでない人も みんなで支えあう地域づくりを!

社会に広がる派遣切りなどの雇用不安によってホームレス問題が深刻さを増している。
NPO法人かごしまホームレス生活者支えあう会(以下支えあう会)は、鹿児島市内の公園でのおにぎり配りなどをとおしてホームレス者支援に取り組んでいる。支援の現場をたずね、会長の堀之内洋一さん、芝田淳さん(グリーンコープかごしま生協組合員)、小川美沙子さん(同組合員)に会の活動について聞いた。



▲左から芝田さん、堀之内さん、小川さん
(「ボランティアスペース結い」にて)

いま地域を考える

No.195

NPO法人 かごしまホームレス生活者支えあう会

支えあう会は毎週火・木・日曜日の夕方5時から、市内の中央公園でホームレス者への支援活動を行っている。毎回用意するのはおにぎりとお味噌汁。これにグリーンコープから提供されたネグロスバナナで作ったバナナケーキが加わる時もある。これもスタッフの手作りだ。

毎回10人くらいのホームレス者が集まる。野宿生活をしている人の状況はさまざま。支援にあたっては、まずその場での聞き取りからはじめる。その後、人によっては近くの事務所「ボランティアスペース結い」に移動して、さらに生活保護の申請や就労についての相談に入る。

自分たちでできる支援を

この間、ホームレス者は大都市だけではなく、鹿児島でも見かけるようになってきた。2004年、教会のホームレス者支援活動に参加した堀之内さんら5人の有志が、「自分たちでも何かできないか」と模索をはじめた。それが支えあう



▲中央公園で温かい味噌汁やおにぎりを配る



▲月1回、料理実習教室を開催。みんなで作り、いっしょに飲談しながら食べるのは楽しい

会の立ち上げにつながった。支援活動は、常時10人程度のホームレス者がいる桜島フェリー桟橋周辺の夜回りから開始した。教会の支援と重複しないように公園でのおにぎり配りもはじめた。次第に支援内容も食への配給だけでなく、自立の支援も行うようになった。ホームレス者の話を聞き、一人ひとりの状況に合った自立を考える。自立のための住居を安く提供してくれる不動産業者や、病気を抱えている人に快く対応してくれる病院の協力も得て一つずついねいに解決へと導いていった。

NPO法人として

民間団体による支援がスムーズに運ぶ背景には、鹿児島市による公的なホームレス支援がすすんでいたことにあるようだ。それは、「光の鹿児島方式」と呼ばれ、その方面ではよく知られている。公園や橋の下などを現住所に生活保護申請を受け付けるなど、迅速に手続きに応じる。併せて、市営住宅を住まいとして提

供したり、急迫状態の人に一時金を即日支給するなど、積極的にホームレス者支援をすすめている。

会は2007年、野宿生活から脱却した元ホームレス者らが2年にわたり炊き出しを続ける「グループ『桜島館』」と合流し、NPO法人となった。活動に広がりとお興行ができ、週3日のおにぎり配りを定例化することができた。現在、会員86人。カンパや物資支援、ボランティアへの参加を呼びかけて活動している。会員にはグリーンコープの組合員も多い。また、グリーンコープからはネグロスバナナや米など物資の提供も受けている。

支えあうということ

支えあう会では、自立をはじめた人が自炊できるよ

うにと、月1回日曜日、1回300円の「料理実習教室」を中央公民館で開催している。そこに集うことにより、コミュニケーションを築き、人と人の関係を構築する場をめざしている。同時に病院関係者の協力で行う健康相談のコーナーもある。こうした企画を通信にまとめ、自立したメンバ

2009年9月の組合員数 409532人 (9/25現在)

リユース リサイクル データ 2009年8月分

牛乳びん	リユースびん	トレー	モールドパック
回収本数 846,333本 回収率 99.9% (7月19日～8月15日回収分)	回収本数 214,631本 回収率 65.8%	回収重量 11,800kg 回収率 55.4%	回収重量 34,280kg 回収率 89.5%

放射能汚染測定結果報告(192) 2009年8月

検体名	産地	セシウム134	セシウム137	合計ベクレル/kg
※ カレー粉		ND	ND	ND
※ 蜂蜜	中国	ND	ND	ND
※ 鶏肉	熊本県	ND	ND	ND
※ 鶏肉	山口県	ND	ND	ND
※ 鶏卵	熊本県	ND	ND	ND
※ 鶏卵	福岡県	ND	ND	ND

(お詫びと訂正) 本紙9月号5面に誤りがありました。訂正してお詫びします。
(誤)円録→(正)家計とくらしのワーカーズ円録
本紙10月号3面に誤りがありました。訂正してお詫びします。
(誤)利用推進委員長濱崎弘子さん→(正)利用普及推進委員長濱崎博子さん

た人がまた路上に戻るケースも少なくない。再就職を果たしても行方が分からなくなる人もいる。自立した後のフォローの必要を強く感じるが、手が回らないのが現状だ。「支えあう会が行っている、当事者の話を聞いて自立の道を探る作業は、そもそも公的なケースワーカーの仕事。アフターフォローが大事だと分かっています。民間で続けるのは、人的にも、経済的にも限界があります」と芝田さんは厳しい状況を語る。

「メンバーの誕生日にパーティーを企画して、心を開いて助けを求めよう」と支えあう会への信頼が生まれてから。その瞬間が支援する側の喜びの時でもある。

しかし、ホームレス者が路上から居宅へ移動することは生活再生のスタートラインにすぎない。ホームレスだった人が自立して地域の人と共に生きて老いていく社会を作ることが「支えあう会」の究極の望みだ。

「今の社会は、狭い価値観によって『健全さ』という平均像を作っている。それが偏見となって、ホームレス者だけでなく、障がいのある人や高齢者など弱い立場の人々を社会から隔離しようとする。生活困窮者全体の支援の取り組みとして、地域の中で共に暮らしたい」と夢を語る堀之内さんのまなざしは熱い。

地域の中で 共に生きていく

「支援を受けた人の表情が変わる瞬間があるんです。ずっとうつむいてばかりいた人がふと顔を上げて『うれしい』という顔をします。気持ちの通いあいを感じる